

「第39回住まいのリフォームコンクール」総評

個人的な話で恐縮だが、長らく委員長をお務めだった真鍋恒博先生に代わり、本年度から私が委員長を務めることになった。今ではリフォームやリノベーションの実践を対象とするコンクールは少なくないが、とりわけ歴史が長く、最も伝統のあるコンクールである。その審査委員長を仰せつかったわけだから、大いに身の引き締まる思いだし、一体どんな人たちによるどんな地域のどんな作品が集まって来るのか、とても興味を惹かれる。最新のリフォームやリノベーションの面白い実践例を見る楽しみが続くのだと思うとワクワクしてくる。

さて、今年もコロナ禍で色々と制約を受けながらの審査だったが、予想以上に楽しませて頂いた。日本のリフォーム、リノベーションの世界は、明らかに幅を広げ、その上で深みを増している。これはもう新築では実現できないと思わせる独自の価値をものにしていく実践例が目白押しである。

先ず、工事の対象になった既存建物の幅。様々な構法での新築が混在する日本の住宅市場のあり様が、そのまま住宅ストックの構成に現れている。普通の国ならば、既存住宅の構法はほぼ決まり。例えばアメリカだと日本で言うところのツーバイフォー構法だろう。ところが、日本の場合はそこが違っている。木造軸組構法(所謂在来構法)もあればツーバイフォー構法もある。同じ木造軸組構法と言っても、戦前の土壁を使ったような民家や町家の構法は、面材を多用しサイディング等の工業製品で乾式主体に仕上げた現代の木造住宅のそれとは、とても同じものとは言えない。そこに、数は多くないが在来の鋼構造やRC造も混じって来るし、大手住宅メーカーが多く手掛けてきた鋼構造のプレハブ

住宅や木質系プレハブ住宅、コンクリート系プレハブ住宅も顔を出す。さらに集合住宅が加わるともっと多様になる。日本のリフォームやリノベーションの幅が広がるのは、この日本独特の既存住宅の種類の高さに起因する。

今回の各賞の受賞作を見ても、そう古いものではないが、土壁等の伝統構法を用いた木造住宅、戦災を免れた地区で見かける古い町家のように、現代の新築木造住宅の世界では見られない類の住宅を対象にしたリフォームがある。しかも、これらの木造住宅が建設された頃には全く重視されていなかったのに、今では高い性能の実現が当たり前になりつつある性能項目について、今日の要求に応え得る技法を駆使している。多少費用はかかるとは言え、大したものである。先に私が「深み」と言ったものだ。そして、このことで新築では決して手に入れることのできない空間価値を実現しているところ、そしてそれがどうやら広範な市場の動きになってきているところに、大いに感じるところがあった。そう、これでこそそのリフォームでありリノベーションである。

珍しくコンクリート系プレハブ住宅を対象とした、個人の「生きる」を支える継続的なリフォームも、スパゲッティのように複雑にからまった集合住宅の配管を解きほぐしながら長寿命化更新したリフォームも受賞作の中にあっただ。何と幅広く深い世界に到達したものか。改めて心動かされた。

第39回住まいのリフォームコンクール審査委員会
委員長 松村 秀一